

寄 生 虫 検 査

動 向

平成7年度の学校保健法の改正後、ぎょう虫卵検査の対象学年は県下一部地域を除き、小学校1～3年生までとして定着している。今年度は、横浜市・秦野市が実施、平塚市・茅ヶ崎市は他検診機関へ移行した。その結果、前年度に比べ、受検学校数は、323校増（25.4%）、受検者数は84,963名増（33.9%）となった。

ぎょう虫卵陽性者の割合は年々減少し、前年度と同様に1%を大きく下回り0.15%となった。合わせて寄生虫（ぎょう虫）ゼロの学校の割合も全体で87.5%となり、ぎょう虫卵検査の本来の目的を達成しつつある。当協会ではぎょう虫卵検査に限らず学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するだけでなく、学校現場の要望に答え、行政、医師会等と連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢を今後も進めていく。

方 法

ぎょう虫検査

当施設ではウスイ式セロハンテープをもちいた二日連続採卵法で検査をおこなっている。ぎょう虫は普通回腸と盲腸の近辺に寄生しているが産卵時期になると直腸まで下ってきて、夜間肛門から這い出し、肛門の周囲に卵を産む習性がある。このため糞便中には卵は見つからない。検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに検査紙のウスイ式セロハンテープを肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲が拭き取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。

精度管理

顕微鏡検査による見落としを防ぐため一度検査したものを再検査し見落としを防ぐとともに、毎日の陽性率をチェックし大きな変動がないかを確認している。

結 果

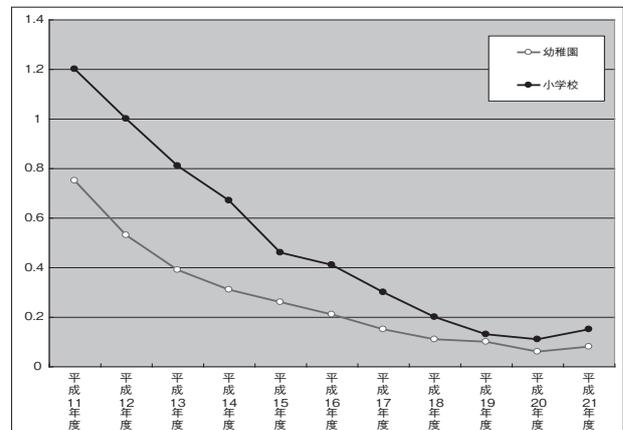
表3に幼稚園・小学校の市町村別ぎょう虫検査成績を示した。小学校での受検者は167,197名で保卵者（陽性者）は259名、陽性率は0.15%だった。20年度の陽性率0.11%に対して0.04%増加した。これは横浜市の小学生95,373名（陽性率0.14%）が加わったためである。陽性率の比較的高かった主な地区は座間市0.54%、鎌倉市0.65%などであった。この傾

向は前年度と同じであるが陽性率は前年より増加している。

幼稚園の受検者は81,571名、保卵者（陽性者）は68名、陽性率は0.08%だった。20年度に引き続き陽性率は0.1%を切っている。このうち公立幼稚園の陽性率は0.07%で、20年度の0.04%からはわずかに増加し、私立幼稚園も20年度の0.07%から21年度0.09%とわずかに増加した。

過去10年間のぎょう虫陽性率の年次推移を図に示した。当施設で実施している小学生の陽性率を（●）で、幼稚園児の陽性率を（○）で示した。陽性率全般の推移をみると平成11年度から19年度までは毎年ほぼ一定の割合で減少し続けていたが、20年度時点で減少傾向がとまり、21年度はわずかに上昇に転じているように見える。小学生について見ると、平成11年度の陽性率1.2%から12年度には1.0%となり15年度には0.5%を切った。その後は緩やかな減少傾向となるが平成15年度の陽性率0.46%から19年度の0.13%へ4年間で0.33%減少している。但し18～20年度は横浜市が他検査機関で実施しているため横浜市の状況は反映されていないが、小学生全体の傾向はここ数年変わっていない。また、幼稚園の陽性率は平成11年度の0.75%から徐々に減り続け13年度に0.5%を切り20年度は0.06%まで減少した。

ぎょう虫陽性率の推移を見ると、毎年着実に減少してきた。幼稚園では20年度初めて0.1%を切った。これはほぼ終息に近づいていると言える。このままぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。いずれにしろ確実にぎょう虫症が減少してきたことは明白であり、長年実施してきたぎょう虫検査の効果が実証されつつある。



関係の集計表は164頁に掲載